平出張所における広報活動について
－フェイスtoフェイス－

橋本　幸雄[1]・齋藤　香織[1]

[1]東北地方整備局　磐城国道事務所　平出張所　（〒970-8021 福島県いわき市平中神谷字六本榎20）

工事を施工していくうえで近隣住民の協力が欠かせないため、事業の目的・工事内容を近隣住民の方々に理解していただくためには“どんなことをしていったらいいのか？”を考えたものである。

キーワード　ご近所型／体験型現場見学会，普段着のお付き合い，住民との一体感

1. はじめに

当出張所は一般国道 6 号常磐バイパスと一般国道 49 号平バイパスの 4 車線化工事の監督業務を担当しているが、それに関連した行政マネジメント活動の一つとして、平成 18 年度から“フェイス to フェイス（顔の見える行政）”を重視した現場見学会を実施している。

本論においては、従来の現場見学会と比べてどんな利点があるのか、またどのように事業に反映されてきたのかを報告するものである。

2. 現場見学会を通じた広報活動

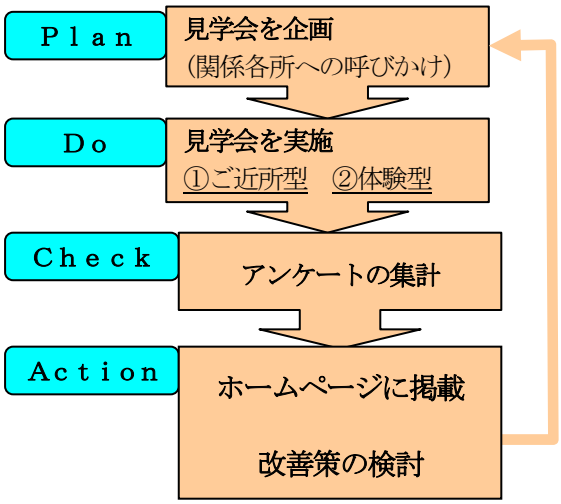

図-1　平出張所における現場見学会の流れ

現場見学会とは“何の工事をしているのか？”“現場内でどんな作業をしているのか？”実際に知ってもらう手段の一つとして行われていると思うが、当出張所ではさらに工事や道路事業への理解を深めてもらうため、①ご近所型 ②体験型の 2 つに分けて現場見学会を開催している。特に①ご近所型現場見学会は、対象者を現場周辺の方に限定して家庭的な雰囲気を創出し、住民の声が聞こえやすい環境づくりに配慮している。

見学会を行うにあたって、⑴積極的な声かけと⑵対話のできる環境づくりの 2 つのポイントを重視している。

(1) 積極的な声かけ

見学会への申し込みを待つだけでなく、こちらからも近隣住民や学校関係者に声をかけて見学会を行っている。

現在、当出張所で施工監督している工事が住居地域内であるケースが多いため、近隣住民の協力は欠かせない。“自分の家の隣でどんな工事をしているのか？”知ってもらう事が必要であり、文書での回覧や直接訪問したりして見学会への参加を呼びかけている。こちらから行動を起こす姿勢が伝わることで、工事や行政を身近に感じてもらい、近隣での新たな工事や通行規制に対しても住民の協力が得やすい。

写真-1　近隣住民への声かけ

一方学校関係者に対する見学会の趣旨は近隣住民に対するものと違い、参加者に対して事業の PR をする＋広く一般向けにも PR したいため、積極的に記者発表を行っている。当日は単なる現場見学のみならず体験の場も用意することで、学生には楽しみながら見学してもらい、マスコミ関係者にはその様子を多数取材してもらっている。学生の生き生きとした様子が新聞やテレビにも放映され、学生の勉強に役立つ＋道路事業の PR にもつながっている。（写真-2、6～8 参照）

(2) 対話のできる環境づくり

ターゲットを絞って見学会を行うことで、説明に対する理解が深まりやすく、質問や参加者間での議論等活発な意見が出やすくなる。

写真-2　取材をうける学生

①　ご近所型現場見学会
《一般国道 49 号「内郷高架橋」》

写真-3、4　家庭的雰囲気の見学会の様子

写真-5　説明について住民からの質問を受けている様子

特に地域住民に対しては、常日頃から監督職員や現場関係者が住民一人一人を意識して挨拶等の積極的な声かけを行っていることもあり、見学会当日も“顔なじみメンバー”で構成され、終始家庭的な雰囲気で行われる。（写真 3～5 参照）ひととおり説明した後は、世間話をするように見学会が進行、何気ない会話の中に潜んでいる意見を拾い出す事で、住民の要望をいち早くキャッチし事業に反映している。お互いに直接顔を見て会話するため事業側に対する安心感が生まれ、住居地域での施工にもかかわらず大きな苦情もなく順調に工事が進んでいる。

当初はなかなか対話するまでに至らなかった住民との距離も、見学会等の“普段着のお付き合い＝フェイス toフェイスによる対応”を通じて徐々に縮まり、後日住民の皆さんの方から声をかけていただいて時には地域の歴史を教えていただくといった事もあり、信頼関係を構築、住民と事業側との一体感を創出している。

②体験型現場見学会
《一般国道 6 号「松久須根橋」他》
（工業高校　工業高等専門学校の生徒さん）

写真-6　ｼｭﾐｯﾄﾊﾝﾏｰによるｺﾝｸﾘｰﾄ強度確認

写真-7　鉄筋に触れてみる

写真-8　ﾚﾝﾁによる橋桁のﾎﾞﾙﾄ締め

写真-9、10　写真を主体としたわかりやすい説明資料

質問事項	近隣住民（回答者23名）	学生（回答者108名）
Q1 この事業は必要だと思いましたか？	100%	97%
Q1-1 参加するまで、この事業を不要だと思っていましたか？	26%	19%
Q1-2（Q1-1 で不要だと思っていた人へ）参加して、必要だと考えが変わりましたか？	100%	95%
Q2 この事業を初めて知りましたか？	13%	31%
Q3 工事に関する技術面での理解が深まりましたか？		86%

表-1　現場見学会終了後のアンケート結果(H18～19)

写真-11　参加者に配布した資料

写真-12、13　住宅地周辺は、通常より狭い間隔でスリット（透明板）を設置

表-1 のアンケート結果をみると、この事業を初めて知った人の割合が近隣住民・学生ともに少なく、特に近くに住んでいない学生でも半数以上が“工事をしている事”は以前から知っていたようだ。しかし、“どんな工事なのか？”という話になると、近隣住民でさえわからないという人が多く、町内回覧や案内看板で周知するといった一方通行のやり方だけでは限界があるようだ。外から眺めるだけでは工事に対して誤解や時には不信感が募る原因になりかねない。やはり、実際に現場を見てもらうことが一番伝わりやすい。見学会に参加すると工事に対する印象が変わり、「参加して良かった」「興味が持てた」等ご意見をいただき、大多数の方から事業の必要性をご理解いただいている。

(3)　フェイスtoフェイスによる活動で得られた住民の声と対応

実際に、現場見学会や住民のお宅を何度か訪問した際に得られたご意見とその後の対応について、２つ紹介する。

a)　本格工事着手前の要望

本格的に工事に着手する前に説明のため、自宅を訪問した際に「防犯上、工事区域を囲む板堀にスリット（透明板）を設けて見通しを良くしてほしい」と要望された。

以前、この近辺で工事があった際に、現場を囲うために設置した板堀の所が学生のたまり場のようになってしまい、時には落書きをされたこともあったため、かなり心配する声があった。施工業者や区長等と相談の結果、要望のあったスリットを設け、さらに住宅に密接している所は、通常より狭い間隔でスリットを設置した。（写真-12 13 参照）なお、夜道も通りやすいようにライトも設けた。

その後、夜道も通りやすいし、防犯上のトラブルもないとのお言葉をいただき、住民と事業側との一体感“みんなで考えた”事例であろう。

b)　橋脚工事に伴う、土の掘削作業時の要望

事業説明等で何度かお宅を訪問したり見学会でお話をしているときに「騒音は大丈夫だが、バックホー作業時の機械移動に伴う振動が時々ある。何か対策を考えてほ

しい。」と要望された。

施工業者とも相談した結果、対策としてバックホーをワンランク上の大きさに変更し、移動回数を減らすようにした。また、住民に振動状況をヒアリングしながら、連続作業時には休憩を多く取るようにし、その後、住民の方からは「振動はあるが、以前より良くなった」とのご理解をいただけている。

このように、小さな不満に早めに気づくことにより、早めの対策を実施することができた事例といえる。

(4) 見学会の様子をホームページに掲載

現場見学会の様子を広く一般向けに発信したり、各現場関係者と情報の共有化を図るためにも、頂いたアンケート結果や見学会の様子をホームページに掲載している。掲載することで、現場内の士気向上にも繋がっている。

写真-14　ホームページにて情報提供

3. おわりに

当出張所の広報活動について現場見学会を中心に述べてきたが、今回紹介したものは一例であり、アンケート結果や周りの意見を踏まえながら様々な方法を模索しているところである。

ご紹介したフェイス to フェイスによる取り組みは今年度で３年目を迎える。徐々に地域にも浸透して、住民の声が多数聞こえるようになり、迅速かつ的確に事業に反映していくことが可能となってきた。特に今年度は供用を控えている箇所もあり、これまでの取り組みのほか、広く一般向けの現場見学会開催も視野に入れて行っていきたい。